【原著】

現代高校生「学びからの逃走」の内実

──受験回避行動に着目して──

濱中淳子，山村滋，鈴木規夫（大学入試センター研究開発部）

日本における「学びの危機」が叫ばれるようになって久しいが，これら主張を入試改革の議論へと結びつけるには，その一歩手前の作業として「学力試験に対するかまえ」という側面から高校生の学習の実態を把握することが必要となろう。本稿は，「受験回避行動」に着目した新しい指標から高校生の学習行動に迫り，そこから入試改革の方向性や可能性について検討を加えるものである。

1 はじめに

日本における「学びの危機」が叫ばれるようになって久しい。教育学者の佐藤学が「学びからの逃走」という印象深い言葉で現状に警鐘を鳴らしたのは，いまから十年以上も前になる（佐藤 2000 ）。子どもたちの校外での学習時間は，世界最低レベルにまで落ち込んだ。読書の冊数も，年々ワースト記録を塗り替えている。佐藤はその背景として，急激な近代化が終焉したことで，学校教育へのまなざしがシニカルなものへと変わったことを挙げている。

いまひとつ，関係者から注目を集めた先行研究として，苅谷剛彦による成果が挙げられよう（苅谷 2001 ）。教育社会学者である苅谷は「学びからの逃走」という現実に出身階層という変数を加えた分析を行い，学習時間の減少は低位層ほど深刻だと指摘した。そしてゆとり教育が，教育にかんして強い個人たり得る上位層の子どもとそうではない子どもとのあいだに厳然たる格差をもたらしているという解釈を呈している。

児童・生徒の学習時間が減っている。一部積極的に学んでいる層もあるが，学ばない層が拡大しつつある。このことは大学関係者にとって極めて重い事実であり，だからこそ，高大接続テストをはじめとする新しい大学入試のあり方に関心が集まっているのだろう。しかし，この事実を入試改革の議論へと結びつけるには，その一歩手前の作業として，「学力試験に対するかまえ」という側面から高校生の「学びからの逃走」の実態を見直す必要があるように思われる。高校生たちは，学力試験の受験を回避するような進路選択をするほど，学びから逃げているのか。学力不問の入試で進学しようとしている者は，仮にその進学先に進むにあたって学力試験が必要になったとしたら、希望校を変更しようとするのか。そもそも高校生たちの学びに対するかまえに，入試のありようはどれほどの影響を与えているのか。こうした点がわからなければ，あるべき入試改革の方向性やその可能性もみえてこないからだ。

考えてみれば，学びの危機論の起爆剤となったのは，一部理科系大学教員らによる大学生の数学力低下をめぐる告発だった（岡部・西村・戸瀬編 1999 ， 2000 ）。そこでは，入試の科目数削減と高校における選択中心の教育課程の帰結として，分数や小数ができない学生が進学しているという論が展開されていたが，これら告発と同様の視角，すなわち大学入試の影響を真正面に据えた「学力試験に対するかまえ」の分析が，入試のあり方について考える場では求められるように思う。

本稿では，ひとつの新しい指標に注目しながら，高校生の「学びからの逃走」に改めて迫ってみたい。その新しい指標とは「受験回避行動」指標であり，具体的には，次の質問項目への回答を指す。

質問文：もし，希望の進路に進むために，次の教科の「学力試験」があるとした場合，どのような行動をとると思いますか。

回答：教科（国語・地歴・公民・数学・理科・外国語）ごとに
①進路希望を変更して受験を避ける
②進路希望を変更するかどうか悩む
③不安もあるが，受験に向けて努力する
④とくに不安もなく，受験する
から１つを選択

この質問項目への回答が，どのような分布として確認されるのか。とりわけ「①進路希望を変更して受験を避ける」について，何がいえるのか。回答分布に学習時間や学力不問入試との関連は認められるか。他に回答分布に影響を与える要因はないか。このような探索的な分析結果を提示するのが，本稿のねらいである。結果として期待できるのは，冒頭で触れた佐藤（ 2000 ）や苅谷（ 2001 ）のような学習時間指標を用いた従前の研究ではみえなかった実態がみえるようになり，入試に学力試験を新たに課すことの意味が浮き彫りになる。それだけではない。学力不問の入試，あるいは少数科目入試を実施するという大学側の選択が，何のための ── どのような志願者を引き付けるための ── 行動だったのか，という点を改めて知る資料にもなろう。

分析に用いるのは，大学入試センター研究開発部が 2010 年秋に実施した質問紙調査で得られたデータである。この調査は，全国の高校・中等教育学校の約 10 ％である 506 校をランダムサンプリングで対象校として抽出し，各学校に高校３年生１クラスへの実施を依頼するという方法で行った。受験回避行動を含め，進路希望に関する基礎的なデータ，進路選択にあたっての意識や行動，日常生活の実態など，包括的な内容からなる設計となっており，最終的に87.7％にあたる 444 校の協力を得て， 15,315 人分の回答を回収している。ただし，以下の分析では，これら回答のうち，四年制大学進学希望者である 9,254 人のデータを使用する。

2 受験回避行動と学習時間

はじめに，四年制大学進学希望者が受験回避行動への質問に対し，どのように回答したのか，教科別に確認しておこう（表１）。

まず，進学希望者全体の数値をみると，大半が「不安もあるが，受験に向けて努力する」と回答し，「とくに不安もなく受験をする」という者も少なくない。両者を合わせた比率は７～８割ほどであり，ここからは学力試験に対して決して消極的ではない高校生像が浮かび上がる。「進路希望を変更して受験を避ける」と回答した者の比率は，公民の 15.3％が最大であり，外国語ではわずか 5.1 ％だ。

ただ他方で，進学を希望する専門分野別に集計をしなおすと，そこに生徒が受験を回避しようとする傾向の一端をうかがうことがで

表１．大学進学希望者の学力試験へのかまえ

		進路希望を変更して受験を避ける	進路希望を変更するかどうか悩む	不安もあるが、受験に向けて努力する	とくに不安もなく、受験する
四年制大学進学希望者（全体）	国語	5.9%	8.9%	59.9%	25.4%
	地歴	14.2%	15.1%	54.5%	16.2%
	公民	15.3%	16.9%	53.8%	14.0%
	数学	14.9%	12.8%	49.6%	22.6%
	理科	14.0%	14.3%	51.6%	20.1%
	外国語	5.1%	8.9%	63.1%	22.9%
うち文系（人・社）	国語	2.1%	3.9%	62.6%	31.4%
	地歴	7.8%	11.6%	59.4%	21.3%
	公民	10.3%	13.7%	57.4%	18.6%
	数学	27.5%	19.4%	42.0%	11.0%
	理科	26.8%	23.3%	41.7%	8.2%
	外国語	4.6%	7.7%	63.0%	24.7%
うち理系（理・工・農・医・歯・薬）	国語	11.1%	15.0%	54.3%	19.5%
	地歴	21.0%	17.7%	47.7%	13.6%
	公民	20.5%	18.3%	48.3%	12.8%
	数学	1.2%	3.7%	56.2%	38.9%
	理科	1.3%	3.7%	58.1%	36.9%
	外国語	4.8%	8.8%	60.1%	26.3%

きる。たとえば，理・工・農・医・歯・薬学系への進学希望者（以下，「理系」と記述）の２割強は，地歴と公民の受験を避けている。さらに注目されるのは，人文・社会系への進学希望者（以下，「文系」と記述）の３割弱が，数学や理科が受験科目として設定された場合に進路希望を変更すると回答している点である。一部教科に限った回避行動ではあるが，この値は小さいものではない。

そして，この受験回避行動の興味深い特質として，必ずしも「学習しない層」に限って認められるものではない点があげられる。

表２にテスト期間ではない「普段」の「学校の授業以外の学習時間（自宅や図書館，塾などでの学習時間）」と「学力試験へのかまえ」との関係を示した。集計のなかには，学習時間の増加が学力試験への積極的なかまえを生み出しているところも確認される。学習時間が多い文系の生徒ほど，外国語あるいは地歴や公民の試験を「とくに不安もなく，受験する」と回答し，学習に意欲的な理系生徒ほど，数学，理科，そして外国語の学力試験を「とくに不安もなく，受験する」とする。また，学習に時間を割いていない生徒ほど，外国語の試験を避けた進路を選ぶ／進路先を変更するかどうか悩むといった結果も，リーズナブルだといえよう。

しかし，全般的にいえば，こうした明確な関係が見いだせるところはかなり限られている。たとえば，多くの時間を学習に充てている文系の生徒が数学や理科の受験に対して積極的になるというわけではない。学習する理系生徒でも，２割近くが地歴，公民の試験を回避しようとしている。逆に言えば，勉強しない文系生徒が国語の試験を避けようとしているわけではないし，勉強しない理系学生が数学の試験を回避した進路選択をしているわけでもない。さらに理系の生徒については，学習時間が多い生徒ほど，国語の試験を避けるような進路選択をしているという傾向すら

表２　学習時間と学力試験へのかまえ

◆文系

		進路希望を変更して受験を避ける	進路希望を変更するかどうか悩む	不安もあるが、受験に向けて努力する	とくに不安もなく、受験する	
国語	～30分	4.0%	6.2%	61.1%	28.7%	
	1～2時間	1.0%	3.2%	62.3%	33.5%	χ^2=52.858 (p<.000)
	3時間～	1.3%	2.5%	64.0%	32.2%	
地歴	～30分	10.3%	16.0%	58.8%	14.8%	
	1～2時間	5.1%	12.5%	62.4%	20.0%	χ^2=106.745 (p<.000)
	3時間～	7.6%	6.7%	58.3%	27.4%	
公民	～30分	11.9%	18.2%	56.2%	13.7%	
	1～2時間	8.3%	13.4%	60.3%	18.0%	χ^2=69.797 (p<.000)
	3時間～	10.7%	9.6%	56.5%	23.2%	
数学	～30分	29.8%	20.8%	40.6%	8.7%	
	1～2時間	28.8%	20.8%	40.8%	9.6%	χ^2=34.445 (p<.000)
	3時間～	24.2%	17.0%	44.7%	14.1%	
理科	～30分	26.4%	25.0%	40.8%	7.8%	
	1～2時間	26.2%	24.1%	42.6%	7.2%	χ^2=10.454 (p=.107)
	3時間～	27.4%	21.0%	41.9%	9.7%	
外国語	～30分	12.2%	15.7%	56.1%	16.0%	
	1～2時間	2.4%	6.8%	69.6%	21.2%	χ^2=376.940 (p<.000)
	3時間～	1.2%	2.6%	62.5%	33.7%	

◆理系

		進路希望を変更して受験を避ける	進路希望を変更するかどうか悩む	不安もあるが、受験に向けて努力する	とくに不安もなく、受験する	
国語	～30分	7.7%	14.0%	54.5%	23.7%	
	1～2時間	8.7%	14.5%	56.6%	20.2%	χ^2=37.538 (p<.000)
	3時間～	14.4%	16.2%	52.1%	17.3%	
地歴	～30分	20.2%	19.9%	47.1%	12.8%	
	1～2時間	19.5%	18.6%	49.1%	12.8%	χ^2=9.540 (p=.145)
	3時間～	22.9%	16.3%	46.4%	14.4%	
公民	～30分	21.1%	17.1%	50.5%	11.4%	
	1～2時間	18.3%	20.0%	49.0%	12.7%	χ^2=10.636 (p=.100)
	3時間～	22.4%	17.6%	46.5%	13.5%	
数学	～30分	3.2%	7.7%	58.3%	30.7%	
	1～2時間	0.7%	3.4%	58.7%	37.1%	χ^2=87.540 (p<.000)
	3時間～	0.6%	2.0%	53.0%	44.3%	
理科	～30分	3.8%	5.8%	62.5%	27.9%	
	1～2時間	0.4%	3.3%	61.9%	34.5%	χ^2=86.139 (p<.000)
	3時間～	0.9%	2.8%	53.1%	43.2%	
外国語	～30分	13.7%	16.0%	55.9%	14.4%	
	1～2時間	3.4%	8.8%	66.0%	21.9%	χ^2=260.539 (p<.000)
	3時間～	2.1%	5.3%	57.8%	34.9%	

注）不等号は、便宜的に「～30分」と「3時間～」との間に10%以上の差が開いている部分につけた。

確認できる（「～ 30 分」 7.7 %＜「３時間～」14.4%）。学習時間という指標だけではみえてこない学習をめぐる高校生の実態を，ここにはみることができる。

3 学力不問入試は受験回避の促進要因か

高校生の学習をめぐっては，次のような言説を目にすることがある。すなわち「学力不問入試，あるいは少数科目入試が，高校生の学習意欲喚起を困難にしている」というものだ。経験から導かれた知見なのだろうし，容

易に納得がいく指摘でもある。

事実，本稿が用いている調査データからも，これを裏付ける結果を得ることができる。表３は，現在，もっとも真剣に準備している入試（進路先の大学がすでに決定している場合は，決定した進路先に合格した時の入試）における学力試験（小論文は除く）の有無と，表２でも用いた普段の学習時間との関係をみたクロス表である。ここからは，学力試験のある入試に向けて準備している者ほど明らかに学習時間が長いことがわかる。学力試験の存在は学習行動への重要なインセンティブになっている。

しかし，学力試験の影響を「受験回避行動指標」で確認したとき，そこには異なった様相を見出すことができる。表４によれば，学力試験のある入試に向けて準備をしている文系生徒ほど，外国語の試験を「とくに不安もなく，受験する」としており，同様にそうした理系生徒ほど，数学，理科，外国語の試験への不安を感じていない。たしかにそうした差異は確認されるが，目立った違いはそれぐらいである。とくに「進路希望を変更して受験を避ける」について，比率の差は数%でしかなく，むしろ理系の国語，地歴，公民など，学力試験のある入試に向けた準備をしている生徒ほど避けようとするところもある。

学力試験の有無は，学習時間という実際の行動レベルに対しては影響を及ぼしている。けれどもその影響力は，受験回避志向を植え付けるまでには至っていない。学力試験のない入試で大学に進学しようとしている生徒も，その多くが学力試験に対して「不安もあるが，受験に向けて努力する」と回答しているのは，注目される結果である。

表３．学力試験の有無と学習時間

		～30分	1～2時間	3時間～	
全体	試験 無	42.7%	35.6%	21.7%	χ^2=1032.867 (p<.000)
	試験 有	15.0%	34.8%	50.2%	
文系	試験 無	45.0%	34.4%	20.7%	χ^2=404.277 (p<.000)
	試験 有	16.4%	32.6%	51.0%	
理系	試験 無	39.8%	35.3%	24.9%	χ^2=297.031 (p<.000)
	試験 有	12.2%	35.6%	52.2%	

表４．学力試験の有無と学力試験へのかまえ

◆文系

		進路希望を変更して受験を避ける	進路希望を変更するかどうか悩む	不安もあるが、受験に向けて努力する	とくに不安もなく、受験する	
国語	試験 無	2.6%	5.6%	64.4%	27.4%	χ^2=38.991 (p<.000)
	試験 有	1.5%	2.4%	61.5%	34.6%	
地歴	試験 無	8.0%	14.9%	59.5%	17.6%	χ^2=36.446 (p<.000)
	試験 有	6.9%	9.1%	60.4%	23.6%	
公民	試験 無	9.1%	15.6%	58.1%	17.2%	χ^2=11.919 (p=.008)
	試験 有	10.5%	11.9%	58.1%	19.6%	
数学	試験 無	26.7%	22.2%	42.1%	9.1%	χ^2=13.437 (p=.004)
	試験 有	27.7%	17.8%	42.4%	12.0%	
理科	試験 無	24.9%	25.9%	41.5%	7.6%	χ^2=8.913 (p=.030)
	試験 有	27.5%	21.7%	42.1%	8.7%	
外国語	試験 無	7.7%	12.5%	61.7%	18.1%	χ^2=147.83 (p<.000)
	試験 有	2.5%	4.4%	64.3%	28.8%	

◆理系

		進路希望を変更して受験を避ける	進路希望を変更するかどうか悩む	不安もあるが、受験に向けて努力する	とくに不安もなく、受験する	
国語	試験 無	9.1%	12.9%	56.8%	21.1%	χ^2=7.781 (p=.051)
	試験 有	11.7%	15.7%	53.6%	19.1%	
地歴	試験 無	17.0%	20.2%	49.9%	12.9%	χ^2=10.366 (p=.016)
	試験 有	22.3%	17.3%	46.9%	13.6%	
公民	試験 無	17.9%	17.5%	52.5%	12.1%	χ^2=6.989 (p=.072)
	試験 有	21.4%	18.6%	46.9%	13.0%	
数学	試験 無	2.4%	6.9%	61.6%	29.1%	χ^2=67.858 (p<.000)
	試験 有	0.8%	2.5%	54.7%	42.1%	
理科	試験 無	2.1%	5.5%	63.9%	28.5%	χ^2=39.459 (p<.000)
	試験 有	1.0%	2.7%	56.6%	39.7%	
外国語	試験 無	8.2%	15.2%	59.2%	17.4%	χ^2=92.109 (p<.000)
	試験 有	3.6%	6.7%	61.1%	28.6%	

注）不等号は、便宜的に「試験 無」と「試験 有」との間に10%以上の差が開いている部分につけた。

4 受験回避行動からみえる現状と課題

現代の高校生は，必ずしも学力試験に対して消極的な姿勢ばかりをみせているわけではない。いま，学習に時間を割いていない生徒でも，あるいは学力不問入試で進学しようとしている生徒でも，関係なく，学力試験が課せられれば，それに向けて努力する。ただやはり，進学先の分野と教科の組み合わせによっては，学力試験の受験を回避する進路選択をしようとしている者が一定の比率でいるこ

とも忘れてはならない。本稿では最後に，文系進学を希望している者にとっての【数学】受験回避行動，理系進学を希望している者にとっての【国語】受験回避行動の２つに焦点をあて，受験を回避すると回答しているのが誰なのか ── この問題について，ひとつの興味深い分析結果を示しておきたい。

これまで「学習時間」と「入試における学力試験の有無」を考慮した分析を行ってきたが，それ以外に「かまえ」を規定している重要な要因がないかを探ると，生徒が属している「高校のタイプ」に興味深い影響をみることができた。表５は，入学偏差値を基準に高校のタイプを「進学校」，「中位校」，「進路多様校」の３つにわけ[1)]，タイプ別に「学力試験へのかまえ」の回答分布を示したものである。ここから明らかになのは，受験回避しようとしているのは，進路多様校の生徒ではない。そうではなく，むしろ中位校，あるいは進学校の生徒だということだ。

文系の数学受験の場合，進路多様校で受験を回避しようとする者は，27.7％。その値は進学校の18.0％よりは大きいが，中位校の34.6％より小さい。理系の国語受験に至っては，進路多様校の受験回避比率が 8.3 ％ともっとも小さい。進学校は10.7％，中位校はそのうえをいき，13.3％という値を示す。

学力試験がある入試から遠い距離にありそうな進路多様校の生徒に顕著な受験回避傾向がみられるわけではない。この注目される結果は，いまひとつの分析でも追認することができる。表６は，「進路希望を変更して受験を避ける」を選んだ者を１，それ以外の選択肢を選んだ者を０とするダミー変数を従属変数としたロジスティック回帰分析の結果である。独立変数には，進学校を基準にした「中位校」と「進路多様校」の２つのダミー変数，「普段の学習時間」，学力試験がある入試で進学しようとしている者を基準とした「学力試験なし」ダミー，さらに文系の場合には「数学の成績」，理系には「国語の成績」（ともに５段階尺度による自己評価）を設定した。

表５　高校のタイプと学力試験へのかまえ

◆文系・数学

	進路希望を変更して受験を避ける	進路希望を変更するかどうか悩む	不安もあるが、受験に向けて努力する	とくに不安もなく、受験する
進路多様校	27.7%	22.9%	40.7%	8.7%
中位校	34.6%	18.3%	38.6%	8.6%
進学校	18.0%	16.9%	47.0%	18.1%

χ^2=110.942 (p<.000)

◆理系・国語

	進路希望を変更して受験を避ける	進路希望を変更するかどうか悩む	不安もあるが、受験に向けて努力する	とくに不安もなく、受験する
進路多様校	8.3%	12.5%	59.5%	19.8%
中位校	13.3%	14.6%	54.5%	17.6%
進学校	10.7%	18.8%	48.4%	22.1%

χ^2=32.809 (p<.000)

表６【受験回避】ロジスティック回帰分析結果

	文系【数学】受験回避		理系【国語】受験回避	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)
中位校	1.166	3.208 **	.321	1.379 *
進路多様校	.917	2.503 **	−.051	.951
普段の学習時間	−.047	.954	.154	1.167 **
学力試験なし	−.130	.878	.127	1.135
数学成績	−.684	.505 **		
国語成績			−.516	.597 **
定数	.049	1.050	−1.495	.224 **
－２対数尤度	2481.301		1577.126	
Cox&Snell R^2	0.150		.043	
Hosmer−Lemeshow検定 χ^2	9.368（p=.312）		8.657（p=.372）	
ケース数	2534		2434	

**1%水準で有意　＊5%水準で有意

結果を簡単に要約すれば，文系の数学については，学習時間や学力試験の有無に有意な効果は認められないが，数学の成績が良ければ，受験回避しようとする確率が低くなる。理系の国語については，学習時間が多い者ほど受験を回避する傾向が強くなり，ただし国語の成績が良ければ受験回避はしなくなる。そうした点を抑えつつ，そのうえで強調しておきたいのは，学校タイプの変数にあらわれている係数である。すなわち，文系の数学の場合，進学校に比べて中位校，進路多様校に強い受験回避傾向が認められるが，より強いのは中位校のほうである。そして，理系の国語の場合，進路多様校の回避確率は，進学校

に比べて有意に高いとはいえない。有意に高くなっているのは，中位校のみである。

なるほど，こうした結果を踏まえれば，近年広まった学力不問入試，あるいは少数科目入試というのは，大学側が自覚的であったにしろそうでなかったにしろ，中位校の学生を集めるのに効果的な手段だったということになる。大学経営の戦略としてはいわば合理的だったともいえよう。しかし，こうした個別大学の事情を超え，大学入試全般のあり方というものを考えるとき，これら知見から何が主張されうるのか。この点について最後に触れておきたい。

5 まとめと考察

本稿では「受験回避行動」という新しい指標を用いて，高校生の「学びからの逃走」への再接近を試みた。分析からは，１）全般的に四年制大学進学希望者は，学力試験を避けるような進路選択をするほど学びから逃げているわけではない，２）入試における学力試験の有無は学習時間こそ規定するものの，受験回避をするかどうかといった学力試験へのかまえにまでは明確な影響を及ぼしていない，３）ただし，進学先の分野と教科の組み合わせによっては，受験を回避した進路選択を試みる者が一定の比率で存在している，４）文系進学希望者にとっての数学受験，理系進学希望者にとっての国語受験をとりあげ，受験回避行動をとる者の属性をみれば，進路多様校よりも中位校などに多く認められた，といった点が確認された。

さて，この結果を入試改革論議の文脈においたとき，何が言えるだろうか。ひとつ大事な示唆として抽出されるのは「学力試験への期待」だと思われる。現代高校生は学習時間に多くを割いていないかもしれない。しかし，その多くが「学力試験が課せられれば努力する」としており，逆にいえば「課せられていないから努力しない」のが現状ともいえる。高校生は学ばなくなった。学習から逃げている。そうした社会や大学の側の過剰な反応こそが，さらなる学ばない高校生たちを作り出しているとはいえないだろうか。

また，進路多様校に顕著な受験回避傾向が認められなかったことを踏まえれば，学力試験が学力の「底上げ」に寄与するとも考えられる。たしかに個別大学にとっては，中位校の志願者を手放すといった望ましくない問題をもたらすかもしれないが，いま少し広い視野からの検討も必要であろう。

いうまでもなく，今回用いた「受験回避行動」指標には，その設計上の限界がある。また，「学力試験への期待」といえども，その構想については，別途検討すべき大きな課題である。ただ，改めて主張しておきたいのは，学力試験を課すことの意義を真っ向から扱った研究の少なさとその必要性についてである。その蓄積が望まれる。

注

１）関塾教育研究所編(2005)を資料に，入学偏差値 60 以上となっている学校を進学校， 50 以上 60 未満の学校を中位校，50 未満の学校を進路多様校とした。

引用文献

関塾教育研究所編 (2005). 『最新版　全国高校・中学偏差値総覧』株式会社関塾 .

苅谷剛彦 (2001). 『階層化日本と教育危機――不平等再生産から意欲格差社会』有信堂 .

岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄編 (1999). 『分数ができない大学生―― 21 世紀の日本が危ない』東洋経済新報社 .

岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄編 (2000). 『小数ができない大学生――国公立大学も学力崩壊』東洋経済新報社 .

佐藤学(2000). 『「学び」から逃走する子どもたち』岩波ブックレット.